

目的 衣服設計におけるゆとり量の設定は、フィット性、機能性、審美性の点から重要であり、その量と位置、配分についてはさまざまな観点から研究が報告されている。本研究では、動作にともなって加わる衣服圧を定量的に測定すると共に、身体への圧迫感を官能検査法により捉え、両者の関係からブラウスのゆとり量について検討した。

方法 衣服圧の測定：被験者はJISサイズ7、9、11号の体型に適合する若年女子9名である。実験用ブラウスはポリエステルと綿混紡の80番アコードで作製し、衿なし、半袖のアンダーブラウスである。胸囲のゆとり量は4~14cmの2cmピッチで6種類とした。衣服圧測定装置は、動はずみ計にマルチコーダーを接続し、超小型圧力変換器 $2\text{kgf}/\text{cm}^2$ を用いた。測定箇所は袖6、後身ごろ10の計16箇所である。動作は両上肢 90° 前拳、 90° 側拳、 180° 上拳、前屈の4動作である。官能検査法：「きつい、ゆるい」の判定は5段階評価とし解析方法は田口氏の累積度数法である。

結果 衣服圧について；胸囲のゆとり量別についてみると、4~6cmのゆとり量は、8~14cmに比べて衣服圧が高い傾向を示した。動作別では前屈時の衣服圧が高かった。またいずれの動作においても、袖の上腕部では背幅に比べて $10\sim 20\text{kgf}/\text{cm}^2$ ほど高い圧力であった。衣服圧の分布についてみると、袖ほどの動作においても前袖側の衣服圧が大きかった。後身ごろでは、肩甲骨、後腋点の部位に $40\text{kgf}/\text{cm}^2$ を超える圧力がかかった。官能検査による着用感について；ゆとり量のちがいにより影響を受ける部位は、上腕最大囲であり、次いで背幅、腕付根囲の順であった。